内藤連三氏の人となり

取材先　　：　天野博（矢作川沿岸水質保全対策協議会　事務局長）
取材日　　：　2017～2018年度
調査員及びレポート作成者　：　内田臣一、清水雅子
資料提供者　：　野田賢司（矢作川環境技術研究会）

清水：内田先生、今日はどこに行ってきたんですか？
内田：今日は、内藤連三さんの人となりを伺いに、矢水協（矢作川沿岸水質保全対策協議会）の天野事務局長さんのところに行ってきたんだよ。
清水：おおっ！　内藤連三さんといえば、伝説の方ですよねっ。矢水協をつくって、工場排水を垂れ流していた工場を見つけてはガンガン指導して、自治体にも働きかける、環境活動家なんですよね。メチャクチャ怖い方で、だから水質汚濁防止法ができたって聞きました。
内田：確かに「鬼の内藤」と言われたようだけど、清水サンはちょっと誤解しているかもね。かくいうわたくしも、内藤連三さんという方がどういう人かはよく知らなかったので、天野さんに会って聞いてきたの。
清水：わぁ、私も内藤連三さんのこと、知りたかったんですよ。でも、ネット検索してもあまり詳しくは出てこないんですよね。ウィキペディアにも載ってないし。
内田：じゃあ、まずは、矢水協について、簡単におさらいしましょう。矢作川環境技術研究会の野田賢司さんの書いた文章を引用しちゃうよ。

ゴルフ場造成工事現場対策指導（平成5年頃）
左から二人目が内藤連三さん

矢作川沿岸水質保全対策協議会について

【水質汚濁の激化と清流を取り戻すための矢水協の活動（流域共存の思想へ）】
1950年代後半から矢作川上流域で盛んになった鉱工業の排水や乱開発の濁水は、下流域の農業（水田）や沿岸漁業（漁場）に大きな被害を与えた。流域の土地利用が急速に変化（工場配置・都市化）し、水需要や水の汚れをめぐって上下流の利害が対立するようになった。
1969（昭和44）年、利水地域を含む矢作川水系の全河川および三河湾漁場の水質浄化を目指すため、下流域の農業団体と漁業団体および河川から用水取水する市町村によって「矢作川沿岸水質保全対策協議会」（通称　矢水協）が組織された。関係行政区は14市町村である。
清流を取り戻すための活動（矢作川の水質浄化運動）は、初代事務局長の内藤連三氏が中心となり、監視と調査、厳しい水質基準による事業所の排水処理の指導、造成工事の濁水対策の指導、行政に乱開発防止を働きかけるなど、粘り強く推進した。
現場体験から、お互いの立場を理解し気配りすることが協調を生む鍵であることが会得される。対立関係にあった上下流住民に交流が芽生え、環境教育、啓発活動、矢水協の支援団体づくりが行われた。
その過程から「流域は一つ、運命共同体」が合言葉になり、姉妹町協定・地域づくり・水源の森分収育林等にも発展した。

清水：内藤連三さんは、明治用水土地改良区や矢水協という立場にあったにしても、矢作川の水質浄化のために事業所の排水処理の指導とか開発事業者の濁水排水を止めさせようと抗議したり、と、行政への働きかけなどを続けたのって、勇気と行動力、そして根気があったんだね。
内田：内藤連三さんは、現場主義の方で、常に現場に行き、証拠となる写真データや水質試験結果など科学的見地に基づいて、事業所を指導（水質汚濁防止法の排水基準施行前）・要請や抗議（同排水基準施行後）したり、行政に要請したりしたようだよ。
清水：また、鬼の形相で工場に立ち入りしていただけではなく、対立していた矢作川の上下流の利害関係者間の交流機会をつくって、対話と相互理解を促したんだね。なんだか、内藤さんは悪事に対しては修羅になり人間には菩薩になる、本当に人間らしい方だったんですね。

内田：内藤さんは、農漁業者の生活のために、常に現場主義で現場と向き合ってこられたとのこと。だからこそ、農漁業だけではない、その地その地で生活している人々の暮らしともちゃんと向き合う必要を感じたのかもしれないね。

清水：あれっ、“流域は一つ、運命共同体”って、矢作川流域圏懇談会の標語になっているよね。もしかして、この標語は矢水協の合言葉からパクったの？

内田：パクったと人聞きが悪いなぁ。もともとこの合言葉は昭和53年に伊藤郷平博士（当時 愛知教育大学長）が「矢作川流域開発研究会」会長として流域全市町村の住民の連帯感をつくることが水問題の解決の糸口になるとして提唱したもので、矢水協の啓発活動で引き継がれたの。今は矢作川流域の人々の精神的支柱となっているね。

清水：へぇーそうなんだ。知らなかったです。私たち矢作川流域圏懇談会のメンバーにとっても、合言葉の裏にある歴史と精神を知り理解することはとても重要なことね。

内田：では、内藤連三さんの生い立ちやその活動についてまとめるよ。

内藤連三氏の生い立ちと活動

- 昭和7年、高浜市で出生。幼いころ母を亡くす。
- 戦死した長兄の影響で陸軍幼年学校をめざし、旧制刈谷中学校へ入学（当時旧制中学2年で幼年学校受験が一般的であった）。戦後の教育制度の変革により新制中学校を卒業し、吉浜役場（後に高浜町役場に併合）の職員となる。
- 昭和27年11月、父の友人だった岡田菊次郎氏（元安城市長）の勧めで、明治用水土地改良区の職員になる。
- 昭和40年代初めのころ、明治用水管理事務所に勤務。矢作川の水が汚染されている実態を見るとともに、農業・漁業に被害が発生している状況を確認し、「苦労して確保した農業用水を守る」との思いでパトロールを始める。
- 明治用水土地改良区など農業・漁業団体により、昭和44年に矢水協が結成されると同時に矢水協事務局担当係、昭和48年5月1日矢水協に出向、5月14日水質保全課長、昭和52年1月1日矢水協出向を解かれ、2月1日明治用水総務部長兼矢水協事務局長に就任。
- 乱開発業者への濁水排出への抗議、悪水排出工場への排水処理指導、国・県・市町村への要望・陳情に奔走する。
- 昭和50年代に入ると、これまでの活動に加えて、対立関係にあった上下流の住民の相互交流、環境教育や啓蒙活動を推進。
- また、愛知県が大規模開発の許可条件に矢水協の同意を必要と決め、流域内の「秩序ある開発」のお目付け役となる。
- これら民間主導型の流域管理は、「矢作川方式」と言われるようになり、昭和60年代からは「矢作川方式」を国内・海外へも伝える活動を行っていた。
- 癌との闘病の末、平成13年8月27日に逝去。

山砂利採取現場

宅地やゴルフ場の造成などの乱開発現場

赤土流出防止等対策シンポジウムで講演する内藤氏
（1998.5.16、沖縄県宜野湾市）

内藤連三氏の人となり

◇とても厳しい人◇
・紳士的だが怖いというのが、周りにはカリスマ性として映ったのだろう。新聞社は「鬼の内藤」とか「内藤天皇」と書いていた。
・とてもこわい人だったので、（天野さんは）早く別の部署に移りたかった。内藤さんの下にいたKaさんは3年、Kiさんは6年しかもたなかった。
・ゴルフ場開発が盛んだった頃、内藤さんが上流の地域の役場に行くと、村長がこわがってトイレから外に逃げ出したことがあった。またその村ではタバコを売ってもらえないこともあった。さすがにその経験が堪えたのか、上流と下流が交流するような活動に力を入れるきっかけになったのかもしれない。

◇賢い戦い◇
・人を動かすのが上手かった。特に報道機関、新聞の論説委員を上手く使った。
・体験を重視していた方なので、周りの人にも、「考えたこと、計画したことをやってみろ。体験してみろ。身で体験したことに自信を持て。」と叱咤激励していた。
・警察を動かすために何をしたらよいのか。また、会社、大学の先生、行政、マスコミ・報道関係者、それぞれを動かすためには何をすべきか、よく分かっていた。

◇人間らしい一面、行動様式の変化◇
・内藤さんは、元々いた明治用水に「帰りたい」と言っていた。
・休日には、奥さんを手伝ってよく漬物を作っていた。その漬物は関係者に配っていた。
・人と人とのつながりを大切にした人。
・趣味は犬の散歩。初めは、乱開発業者を牽制して「ゴルフはやらない」と言っていたが、開発指導が功を奏してきた頃からゴルフを始めた。
・上下流の交流事業では、小学生や山の人を海に招待して潮干狩りに行ったり、そのお返しにと山でイワシの朝市を開いたり、山から下流へ雪を持ってくるといった活動をするようになった。この活動には、矢作川をきれいにする会や衣崎漁港等の民間団体、地元自治体の協力があった。

山の子供手作りのトウモロコシを岩月会長（右）に贈る上田教育長（左）＝安城市の明治用水会館で

山の子からトウモロコシ届く
海へ招待のお礼です
矢作川の上下流が縁で
佐久島や碧南市へ

おじさん、おばさんありがとう。海へ招待してもらったお礼です――。安城市大東町、明治用水会館内の矢作川沿岸水質保全対策協議会事務局を二十八日、長野県下伊那郡平谷村の上田得之教育長が訪れ同村平谷小児童が作ったトウモロコシ三百五十本を贈った。

矢作川の水質浄化をめざす同協議会と同川最上流部の平谷村とは立場の違いから過去に幾度か対立する場面があった。しかし、きれいな川を取り戻すには上流と下流が手を取り合わねば、と相互理解に努め、一昨年から平谷村と碧根羽村の小、中学生を幡豆郡一色町などの海に招待、山の子らを喜びさせている。ことしも七月旬に平谷中学生が一色町に、碧根羽両村の小学生が碧南市へ。これ海やプール遊びを楽しんだ

S55.8.29中日新聞記事

工場排水調査

山の子供達の潮干狩り招待

清水：内藤さんって、仕事をしているときはとても怖かったようですが、奥さんを手伝ったり漬物を配ったりと、結構、気配りの人なんですね。厳しいけど、強くて優しそうな感じで、ステキ。

内田：農業漁業者のために、矢作川の水質を良くしなければならない、という使命感と真剣さから悪いことに対してはとても厳しくて、怖かったのかもしれないね。

清水：昭和40年代までの水質浄化闘争を“ハード路線”と形容するならば、昭和50年代の上下流の交流などは“ソフト路線”といえるかもしれませんね。でも、どちらの戦いも一貫して“矢作川の人々の生活を守る戦い”ですね。

内田：人と人とのつながりを大切にしていた、ということは、とても人間が好きな方だったのかもしれないね。だから、データのみに頼ることなく現場体験を重視し、様々な人たちを理論的にも感情的にも動かす肝を押さえていた。その基本には、様々な人に対する「気配り」があったようだね。

清水：これまでの内藤さん率いる矢水協の活動が、「矢作川方式」を生んだのですよね。でも私、「矢作川方式」っていうと、開発工事の現場で発生する濁水を仮設沈砂池から竹粗朶柵を通過させて放流する沈殿除去方式：濁水対策のことしか思い浮かばなくって、よく知らないです。

内田：内藤連三さん曰く、“矢作川における水質保全活動の全体”を指し示している、とのことだよ。では、内藤連三さんの言葉や思いと重ね合わせながら、「矢作川方式」についてまとめてみよう。

内藤連三さんの思いと矢作川方式

■農業者の使う水を守らなくてはいけない

昭和30年代の高度成長期にあって、矢作川流域の水質も工場排水、土砂採取業者などによるヘドロや濁水により非常に悪化。明治用水土地改良区が中心となり、下流の農民を守るため、そして同じく困っていた漁民を守るため、6農業団体、7漁業団体、5市町により1966年9月に矢水協を設立。監視と実態把握のために工場等への立ち入りと水質調査を行い、実効性のある法整備へ向けた行政への陳情を行った。

■母なる川、矢作川の水は自分たちの手で守るしかない

内藤連三さんが語るエピソード。1969年11月に矢水協の代表が経済企画庁国民生活局を訪れた際、当時の担当課長の「日本を担う企業を潰すつもりですか」という発言から、矢作川の水は自分たちの手で守るしかない、と強く胸に誓った。

そこから、矢水協は更に精力的に。足で集めたデータと1972年に施行された水質汚濁防止法を武器に、汚水を垂れ流していた悪質山砂利採取業者を愛知県警に告発。これが、水質汚濁防止法違反で全国初の告発となり、その後の告発・摘発により工場等事業所からの排水の改善がようやく進むことに。

■流域の人々にはそれぞれの生活がある

1974年のオイルショックを契機に開発行為に低迷が見え始めたころ、工場等への立ち入りや水質汚濁防止法の効果もあり、矢作川の水質もよくなり始めた。

そのような中、これまで主に下流域の生活者を守る活動をしてきたが、本当に守るためには上流域での開発により工場などで生きる人たちのこと、開発業者に山を引き渡さざるを得なくなった上流域の人々の生活も考えないと、という思いに至る。

■流域は一つ、運命共同体

前述のそれぞれの生活を守るため、それまで汚染源としての上流域、被害者としての下流域、という対立関係にある地域住民の相互理解を深めるため、交流事業や環境教育に取り組む。

上流の小学生を下流の潮干狩りに招き、三河湾の取れたてイワシを上流山村に産地直送し朝市を開催。また、上流の岐阜県明智町と下流の一色町の「姉妹提携」を手助けした。矢水協の支援団体組織づくりとして、一色町の5漁協の婦人部で「矢作川をきれいにする会」を結成し、工場排水、乱開発現場のパトロールや環境問題などの勉強会を開催。

■秩序ある開発を

現代の人間が生活する上で開発はなくならない。そうであるなら、流域全体を考えた「秩序ある開発」を進めよう。1985年には流域全体から開発順位を決める「秩序ある開発を求めて」という指針をまとめる。①公共事業、②過疎対策、③地域の経済発展につながる事業という順位で、利益追求型開発を牽制。1976年から愛知県の大規模開発の許可条件に矢水協の同意が必要になったという背景が、秩序ある開発の実効性を担保している。

■解決の方法は現場にある～具体的な公害防止のノウハウづくり～

矢水協自らの現場パトロールを通し、現場の人たちと議論する中、開発など流域で行われる工事で出てしまう濁水の対策を、地域に根差しながら誰でもできる独自の具体的な方法を編み出す。大規模開発事業者に開発前の環境アセスメントを実施し報告書を提出するよう求め、また川の濁りを指標とした監視に基づき工事を進める方法を推し進めた。

矢作川方式の調整池（豊田テストコース造成工事現場にて撮影：2014年）

内田：名前のとおり、矢水協は協議会なんだよね。矢作川の水質をよくしていこう、という思いがある組織・人が集まり、行政のみに頼ることなく、自分たちで理想を実現していくんだ、そのために協議をしてくんだ、ということだよね。

清水：内藤さんは、「農業者の生活を守りたい」という思いから始まり、そのためには結局、「“流域全体の人々の生活”を考えないといけない」という思いに至ったのかな。2010年の生物多様性条約COP10でも学んだけど、私たち地球上の生き物は、みんなつながっているもんね。内藤さん、根っこの目的に真剣、忠実な人だったんだよね。

内田：行政という枠組みではできないことを、矢水協という組織をもって、集まった人たちが自ら責任をもって遂行していく。内藤連三さんは、こんな言葉も遺しているよ。

東京新聞（夕刊） 2001年（平成

矢作川に生きる ◆上◆

内藤連三の志

流域は運命共同体

川上から流れてきた桃から生まれた桃太郎は、自然界の仲間のサルとキジとイヌの協力を得て、みんな困らせる鬼を退治に、鬼が島へ行った。

自然にくるまれた人間の、上下流の助け合いの伝説や信仰行事が全国にある。日本の暮らしの文化は川筋に沿って生まれ、流域に定着してきた。上下流は運命共同体だった。

様変わりするのは明治の近代化からである。汽笛一声、新橋を汽車が発車して以来、縦の川筋を横にぶった切って日本中に鉄道、道路網が広がり、川は行政域を区切る存在となり、流域圏文化は失われていった。

二十二㌔の大きな川である。しかし清流で知られたこの川も、戦後の経済発展の裏側をそのままに映し、開発事業によって汚濁していく。

上流地域で鉱業原料の珪砂や山砂が掘り出されるようになった六〇年代。乱開発によって下流部で一尺余も堆積、三河湾まで埋めた。農業や漁業に大きな被害が発生した。さらに中流部では車関連産業や機械工業などが発展、膨張した都市からの工場廃水、生活排水が矢作川を汚染していった。

農漁民が立ちあがり六九年九月、矢作川沿岸水質保全対策協議会（矢水協）が結成された。農漁民団体を軸に岡崎市、豊田市など沿岸自治体も加わり、住民行政一体の矢作川保全運動がスタートした。

矢水協の事務局は明治用水会館（安城市）に置かれた。以来三十余年、中心になって運動を引っ張ってきたのは当時三十七歳、内藤連三・明治用水土地改良区用水課長だった。

矢作川上流の開発事業を視察する内藤連三・矢水協事務局長＝92年9月、愛知県下山村で

内藤さんを先頭に矢水協の運動は激しかった。深夜に山を這うフクロウ部隊が上流の山土たれ流し現場を次々と暴き、告発を受けた愛知県警は水質汚濁防止法の罰則規定を全国初めて適用、悪質業者を摘発した。

しかし〝鬼〟と恐れられた内藤さんは、上流域を歩きながら過疎山村の苦悩を知る。下流は被害者だが、一方では経済成長の享受者だ。その陰には山村の若者流出があった。上流の暮らしが安定しなければ、下流の環境は守られない。内藤さんは上流山村との交流を始めた。

上流の珪砂業者が下流を視察した（七二年）。岐阜・明智町から三河湾のノリ漁視察へ（七三年）。明智町と愛知・一色町が姉妹提携（七七年）。上流の自治体が矢水協に続々と加盟する（七七年）。そしていま、海と山を結ぶ産物交流や子どもたちの交歓キャンプなど、親戚のようになった上流と下流の付き合いが続いている。

内藤さんは八二年夏、名古屋の地下街で若者に「おじさん」と声を掛けられた。矢作川の交流で潮干狩りに来たことのある長野県平谷村の子だった。

2001.10.23
東京新聞
夕刊記事

内藤連三さんのことば

かつて敵味方に分かれて闘争した問題も、お互いが話し合い、理解していくことによって、最後には協調と協和の中で、解決が図られるようになったのである。

それこそ「矢作川方式」の最大の勝利と言えるのではないか。

清水：うわっ、内藤連三さんのことば、ステキすぎて涙が出そうです！　私も大好きな矢作川流域の人たちは、矢作川という風土から形成された生き物でもあるね。でも、「矢作川方式」が勝利できたのは、やはり、そこに内藤連三という素直で真剣な方がいた、ということが大きな要因ではないかなって、思いました。あーもっともっと、内藤連三さんや矢水協のこと知りたくなってしまいました。

内田：また、天野さんや野田さんにも話を聞きに行きたいね。後に参考文献も記しておくから、読むと良いよ。さあ、我々もぼやぼやしてられないね。お互い、それぞれの場所で、自分の使命を果たしていかないとね。

清水：はいっ、内田先生、私も今いる場所で頑張ります。

＜参考文献＞

伊藤郷平（1978）：流域定住圏論～矢作川流域開発研究会の歩みとその軌跡～，地理学報告第47号，pp40-50

岩月鉦一（1977）：きれいな水を求めて，林業あいちNo.272，pp2-3

内藤連三（1999）：水質浄化運動30年の闘い（第1回日本水大賞グランプリ），河川No.634，pp44-47
http://www.japanriver.or.jp/taisyo/oubo_jyusyou/jyusyou_katudou/no1/no1_pdf/yahagi.pdf

内藤連三(2002)：公開研究発表会閉会のことば，水は生きている2002，p86

野田賢司（2014）：矢作川における水環境保全の取組の歴史と特徴，三河湾再生プロジェクト三河湾環境再ワークショップ2014in知多 特別講演要旨

太田隆之（2005）：資源管理における制度構築問題とリーダーシップ―矢作川の水質管理を事例に，環境経済・政策学会編「環境再生」，東洋経済新報社.

太田隆之（2007）：流域水管理における主体間の利害調整：矢作川の水質管理を素材として，松下和夫編著「環境ガバナンス」，京都大学学術出版会.

太田隆之・諸富徹（2006）：里川への経済学的アプローチ　矢作川の保全活動から，鳥越晧之・嘉田由紀子・陣内秀信・沖大幹編「里川の可能性」，新曜社.